

共同課題について

有賀 喜左工門

舊の三十日に課題委員を中心にして東京会
員の有志が本年の共同課題について前合つた
時、第二回大会の懇話会の折の会員の発言を
辿つていろいろ考へて見た。あの折課題を決
定することは出来なかつたが、何かもつと基
礎的なものを選んで共同討論をしたいといふ
線は出ていた。それに問題をなほきりしぼる

という前年度以来の方針との二つは、二回の
大会を通して会員諸兄から要望された重要な
決定事項となつて来たと思つてゐる。

今年の課題をどう定めるかはこれから会員の
意見もきかなくては充分に決定出来ないとし
ても、右の会合での意見のまとまりは「農
家人口」の向題にしたいという点まではま
つて来た。たゞ農家人口と云つても、アアロ
ーチの兼業はいろいろあるから、それは必ず
しもままつたわけではなかつた。その時の話
合いで重要な点をあげて見た。それが前文の
内容である。しかし向題点をどんな風にとり
上げるかはもつと会員諸兄の意見をききま
しと想つてゐるので、これについての意見をよ
せて頂きたいと切望してゐる。

それと共に舊の会合に参加した人々からも
特に強調したい点について寄稿してもらひ、
紙上討論を展開してきめた方がよいという事
になつてゐる。今度の通信に出た意見でま
まるといふ風に考へないで、寄稿をまつた上
でもう一度課題委員において再検討して、決定
しようといふのである。寄稿して頂かないと
向題にならない。賛成でも反対でも表明して
頂きたい。

私の思う所を簡単にのべて見た。農家人
口を向題にするとも云つても、全国的な大きな
統計を取扱うこともある。それも重要である
が、我々の会ではその基礎的な向題を検討す
る意味で個々の村落についてこれを精細に取
扱つて見てはどうだろうか、全体の大きな見
通しを持って村落のそれを扱うことは必要で
あるが、逆の行き方もないといふことも出来
ない。農家人口や農村人口の数的処理が大切だとい
ふことは云う迄もないが、農家人口の向題を
とり上げてもこうした点にのみ終らせたくな

い。これは明治維新以後を見ても大きな変遷
をへていて、これらの動きの中でこれを支
えている個々の農家の家族構成に表れてゐる
所をつかむことは大切ではないかと思つて。云
いかえると農家人口が家族制度と結びつて
ゐる点をとりあげて、家族制度の根本向題や
その変遷を検討したらどうかと思つたのである。
舊の三十日の会合では農業経営との関連を重
要向題として、労働力としての次三男、潜在
失業、兼業等の向題に話が及んだが、これら
は家族制度の根本向題に皆通じてゐる。例え
ば次三男の向題においては、新民法以後直系
傍系の考へ方がなくなつたかどうか。次三男
の労働は無償か有償か、小遣金はどうかして
ゐるか。ホマ子労働の如きものはあるか。通勤
出張による収入は家の経済に對してどんな風
に使われるか。次三男への財産の分配をどう
しようとしてゐるか。財産地帯に對する代償
はあるか。それらの向題に關して家長権はあ
るか。直系との差遣如何。又これらに關係し
て潜在失業の向題を取扱わねばならぬ。女子
の向題もあり、家産、家督等の考へ方の變化
の有無等にもふれなくてはならぬ。農家人口
の保有は農業経営が大きな条件をなすことは
明かであつても、経営を行う主体としての家
族構成とその質的傾向が最も重要である。こ
れは経営の内容を決定して行くのであるから、
この意味で家族構成を捉えなければ意味がな
い。それは家族自身のみでなく、この家族労
働を補う雇用労働やユイ労働をも決定して行
くので、農家人口はこの関連において捉えな
ければならない。したがつてこれらを媒介と
する家關係を捉えることは大切である。そし
て家關係はもつと巾の広い互助關係を持つこ
とは当然であるから、単に農事に限つてはな
らないわけである。このように見ればこれは
もちろん村落共同体の向題にもなるから、そ

ういう背景を考えないわけでは無いとしても、
今年は一軒の農家を中心として上述の如き関
係をこまかく洗出して見て、基礎的な問題を
つかむという事にして見てはどうかと思ふ。
どんな個々の農家にしぼって見た所で、それ
らが交っている家関係は複雑なものである。
個人的関係もあるから、切りのないものにも
なりそうである。少くとも重要な家関係に關
して比較的詳細な図形を描いて、農家經營の
精神的物質的な基礎構造をつかんで見たい。
といつても個々の農家の条件分析が出来ない
と意味はないのだから、村落の生活構造はそ
の背景としてどうしてもつかむ必要があると
いうことにもなる。

一寸気のついた事だけ記し、諸兄の批判を
うけたい。
(東京教育大学)